ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコdeソンコ

Vol.143

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

チェプル(魚皮衣)

本田優子(札幌大学教授)

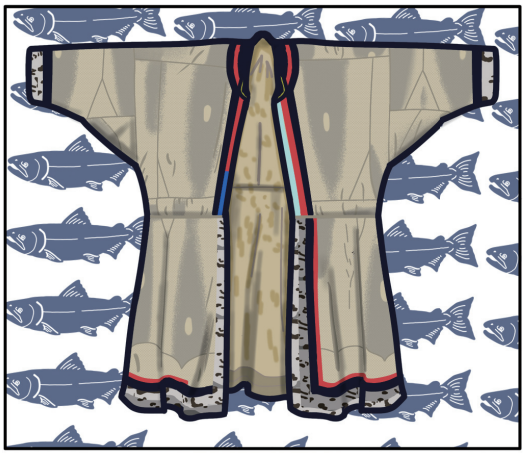
アイヌの衣服文化は、バラエティに富んでいます。なかでも、主に樺太アイヌの人たちが魚の皮で作った衣服「チェプル」(チェプ=魚、ウル=皮衣)は圧倒的存在感。日本語では魚皮衣と訳されますが、以前授業で「魚皮衣」を連発したら学生にこう言われました。「先生、やめて!ギョヒーって叫んでるようにしか聞こえない!」(笑)。以来、もっぱらアイヌ語を使ってます。

北海道アイヌの衣服は和服に似ているけど、チェプルは前開きワンピース型。背びれなどを切り取ってできた穴には、色の違う部分の端皮や布を縫い付けてきれいな文様にするなど、形も文様も北方との強いつながりを感じますね。北海道アイヌも布の上に布を置く、いわばアップリケの手法で文様を作るけど、これは和服にはほとんど見られない手法なので、魚皮衣の影響だとも言われます。

チェプルを作るには、サケ・マス・イトウのような大型の魚の皮を剥いで、なめしてから縫ってつなぎ合わせるんだけど、だいたい五〜六十匹くらい必要だったとのこと。北海道アイヌも鮭皮のチェプケレ(魚の靴)は使ってたけど、なめす技術は、樺太アイヌ、そしてさらにアムール川流域などの北方諸民族、たとえばナナイやニブフの人々の方が優れていたみたい。私が持ってるナナイの魚皮衣(ミニチュア)を授業で回覧すると、学生たちはその手触りの良さにいつも驚きます。

国立民族学博物館名誉教授の大塚和義さんによれば、ニブフの人たちの方法は次の通り。まず魚の皮を剥いで、肉片をそぎ落としてから乾燥させます。それから魚卵などで作ったなめし液を用いながら、その魚皮を叩きます。そのための特殊な台と木槌もあります。何枚も重ねて畳んだ魚皮を二時間も叩くうちにウロコがとれて柔らかくなり、裏側は綿毛のようにフワフワになるとのこと。

でも私は以前、こういう話も聞いたんですよね。「一番良いのは人間が上下の歯で挟んで唾液と一緒に何回も何回もしごくこと。極上のなめし皮になる」。ちょうどその頃、ニブフの方々が来道してアイヌ民族文化祭で芸能発表をされました。主役級のおばあさんが舞台でにっこり笑われた時、前歯がほとんどなくて驚いていたら、公演後に「あれは、魚皮をずっと歯でなめしていてすり切れたんだって」と聞き、心底感動したものでした。 Ⓙ



イラスト/山丸ケニ

次回のテーマは「カンナカムイ(雷神/龍神)」
村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。